

第九章

「菜園家族」の台頭と異次元の新たな科学技術体系の生成・進化の可能性

— 資本の自然適行的分散過程との関連で —

生命系の未来社会論具現化の道である「菜園家族」社会構想による日本社会は、結局、縮小再生産へと向かい、じり貧の状態へと陥っていくのではないか、という危惧の念を一般に抱きがちであるが、果たしてそうなのであろうか。ここでは、この問題を念頭に置きながら話を進めていきたい。

戦後わが国は、科学技術という知的資産を最大限に活用して産業を発展させ、高い経済成長をもって国際経済への寄与を果たすとする「科学技術立国」なるものをめざしてきたし、これからもめざそうとしている。しかし、はたして私たちは、これを手放しで喜ぶことができるのであろうか。

科学技術は市場原理と手を結ぶやいなや、人間の無意識下の欲望を際限なく掻き立て、煽り、一挙に暴走をはじめ、ついには計り知れない惨禍をもたらす。二〇一一年3・11フクシマ原発苛酷事故は、その象徴的な事件であった。科学技術はいつの間にか本来の使命から逸脱し、経済成長の梃子の役割を一方的に担わされる運命を辿ることになったのである。

前章までは、主に労働の主体としての人間の社会的生存形態に着目し、この側面から未来のあるべき社会の姿を見てきたのであるが、この章では、労働と表裏一体の関係にある資本の側面、とりわけ資本の自己増殖運動と科学技術との関連で考えたい。つまり、「菜園家族」という新たな人間の社会的生存形態の創出が、資本の自己増殖運動の歴史的性格と、その制約のもとで歪められてきた科学技術にいかなる変革をもたらす

ことになるのか、そしてこのこととの関わりで、未来社会はどのように展望されるのか、少なくともその糸口だけでも探り当てたいと思う。

資本の自己増殖運動と科学技術

さて資本とは、自己増殖する価値の運動体である。できるだけ多くの剰余価値を生み出し、その剰余価値の内からできるだけ多くの部分を資本に転化して旧資本に追加し、絶えずより多くの新たな剰余価値を生産しようとする。資本は、市場の熾烈な競争の場において自己の存立を維持するために、絶えず生産規模を拡張し、生産力を発展させていかなければならない。それは、資本の蓄積によつてのみ可能である。こうして、蓄積のための蓄積、生産のための生産の拡大が至上命令となる。

結局、資本の所有者は、諸々の資本の運動が織りなす資本主義社会の客観的メカニズムによつて、価値増殖の「狂信者」にならざるをえない。こうして、絶えず剰余価値は資本に転化され、社会的再生産の規模が拡張されていく。こうした価値の自己増殖運動の中で、技術は大きな役割を担うことになり、それがかえつて資本に対して従属的な性格を強めていくことになる。

技術とは、もともと歴史的に見るならば、人間が自己と自己につながる身近な人間の生存を維持するために生まれたものであり、食べ物を採取したり獲物を捕るための労働や、農耕、牧畜、漁撈に必要な技術がその基本であった。身体を守り暖を取るための衣服や住まいの技術、そして病を治す医療の技術も不可欠だった。人間の活動が広がるにつれて技術は多様化し、地域地域の風土に根づいた人間の身の丈にあった技術の実に緩やかな発展が見られた。これこそが本源的な技術である。

しかし、どこかの時点から技術は自然と人間から急速に乖離し、次第に精密化・複雑化・巨大化の道を辿り、自然そして人間とは対立関係に転化していった。そのメルクマールは、イギリス産業革命の進展によつ

て、石炭エネルギーによる機械制大工業が確立した一九世紀二〇年代初頭と見るべきであろう。

特に現代においては、経済成長を成し遂げるには、労働力や資本以上に技術が果たす役割が以前のいかなる時代にも増して重要になり、技術的優位性が国内外の市場での競争力強化と超過利潤獲得のもつとも重要な要因となっている。一九世紀以前においては、技術者・技能工の接触や移民によつて経験や勘からなる技術・技能が比較的容易に移転したのに対して、技術が科学との結びつきを強め、抽象的かつ複雑高度になるにつれて、また、資本の集中の進行によつて技術独占が強固になるにつれて、技術開発や技術移転は組織的計画的活動なしには困難になっていく。こうして、科学技術はますます巨大資本に集中し、独占されていく。そして科学技術者は、このような状況下の資本の自己増殖運動の中で、決定的に大きな役割を演じさせられ、ついに資本の僕しもべの地位にまで貶められていく。

資本の従属的地位に転落した科学技術、それがもたらしたもの

人類始原の石斧など実に素朴な技術からはじまり、精密化・複雑化・巨大化した現代の「高度」な科学技術体系に至るまで、人類の二百数十万年の歴史からすれば、産業革命からわずか二百数十年という瞬くほどのあつという間に、私たちは原発という不気味な妖怪の出没を可能ならしめた。それを可能にしたのは、まさに資本の自己増殖をエンジンに駆動する飽くなき市場競争であり、今日の市場原理至上主義「拡大経済」である。

こうして現代の科学技術は、ますます資本の自己増殖運動の奉仕者としての役割を担わされていく。鉄道、自動車、航空等による輸送・運輸は超高速化するとともに、量的拡大を続ける。都市には超高層ビルが林立し、地下鉄は地中深く幾層にも張りめぐらされる。上下水道、電気、ガス、冷暖房施設等のインフラが整備され、通信・情報ネットワークも急成長を遂げ、パソコン、携帯電話、スマートフォン、タブレット端末等

々の普及・利用は著しい。さらには昨今の急速な情報のデジタル化、人工知能（AI）開発への野望、世界覇権の命運をかけた5G（第5世代移動通信システム）をめぐる米中二超大国間の熾烈な技術開発競争。開発の「フロンティア」は、海底に、そして宇宙に際限なく拡大していく。一方、DNAレベルの解析や量子力学など極小世界の研究と、それらを応用したバイオテクノロジーやナノテクノロジーやマイクロマシンなど新規技術、製品開発もいよいよ進む。科学・技術の対象は、極大と極小の両方向にとりも深くも深くも深化していく。商品開発の資金力、技術力、それにメディアを利用する力は巨大企業に独占される。最先端の科学的知見と技術の粋を動員して、新奇な商品の開発に邁進したり、些細なモデルチェンジをひたすら繰り返してこなせないほどの多機能化をはかたりすると同時に、テレビのコマーシャルや新聞・雑誌・インターネットなどの広告によって、人間の好奇心や欲望を商業主義的に絶えず煽り、強引に需要をつくり出していく。企業の莫大な資金力によって築き上げられた情報・宣伝の巨大な網の目の中で、人々は知らず知らずのうち、浪費があたかも美德であるかのように刷り込まれ、大量生産、大量浪費、大量廃棄型のライフスタイルはいよいよ助長されていく。人間は、自然から隔離された狭隘な人工的でバーチャルな世界にますます閉じ込められ、野性を失い、病的とも言える異常な発達を遂げていく。それが快適な生活で幸福な暮らしだと思ひ込まされている。

欲望を煽られても買わなければいい、と言われるかもしれない。ある面ではそうかもしれない。しかし、消費者は同時に企業の労働者であり、企業が窮地に陥れば、企業の労働者である消費者も同じ運命にあるという「悪因縁の連鎖」の中にあることも事実である。この市場原理至上主義「拡大経済」の社会のほとんどすべての人々は、この「悪因縁の連鎖」につながっているのである。しかも、消費も生産もともに絶え間なく拡大させ、その需給のコマを絶えず円滑に回転させなければ不況に陥るという宿命にある。こうした社会にあつては、浪費は美德として社会的にも定着していかざるをえない。

現代の私たちは、あまりにも忙しい暮らしを強いられている。目的に至るプロセスの妙を愉しむ余裕など、すべて切り捨てられてしまった。コマネズミのように働かされ、効率と時間短縮ばかりを余儀なくされ、目の利便性だけを求めざるを得ないところに絶えず追い込まれている。その結果、こうした忙しい人々のニーズに応えるかのように、多種多様な、しかも莫大な数量の出来合いの選択肢が街中に氾濫し、私たちは仕掛けられた目に見えないこの巨大で不思議な仕組みの中で、ただただ狼狽し目移りしながら、追われるように買い求めていくのである。

こうしたエネルギーと原材料の大量浪費、その行き着く先の大量廃棄を前提とする市場原理至上主義「拡大経済」は、地球環境や地域の自然に不可逆的な損傷を与えている。そして人間の物質生活のみならず、精神さえも歪め荒廃させていく。科学技術はこのように経済社会システムに照応する形で発達を遂げ、危機的状況を迎えている。科学技術には紛れもなく経済社会システムの矛盾が投影されているのである。

そしてついに現代科学技術は原子核にまで手をかけ、世界でもっともシンプルでもっとも美しいと言われているアインシュタインの数式 $E=mc^2$ （エネルギーE、質量m、光速c）どおりに、自然から実に人為的に途方もなく巨大な核エネルギーを引き出し、実用化に成功したかのように見えた。しかし、天の火を盗んだ人間界にゼウスが持たせ寄越したパンドラの箱はついに開けられ、收拾不能の事態に陥ってしまったのである。際限のない資本の自己増殖運動がもたらした現代科学技術のこの恐るべきあまりにも悲惨な結末に、私たち現代人はどう向き合い、どうすべきかが今、問われている。

GDPの内実を問うー経済成長至上主義への疑問

「快適さ」や「利便性」や「スピード」への人間の飽くなき欲求。私たちはこれまで、巨大資本の広告の

氾濫の中で欲望や好奇心を煽られ、モノを買わされてきた。こうした「つくり出された需要」を絶えず生み出すために、科学技術は動員され、歪められてきた。それが巨大な商品であればあるほど実が大がかりに、しかも組織的に行われていく。私たちの身の回りにあるもので、はたして自分の生存にとって本当に必要なものはどれだけあるのであろうか。それどころか、自らの手でモノをつくり出す力を奪われ、何よりも人間の身体を、そして精神をどれだけ傷つけ損なってきたことか。無理矢理「つくり出された需要」によって需要と供給の円環を絶えず回すことで、経済は好転すると信じられてきた。そしてこの虚しい需要と供給の回転ゴマを絶えず回すために、イノベーションと称して科学技術は実にけなげに奉仕させられてきたのである。資本の自己増殖が自己目的化され、科学技術は、市場競争至上主義のこの本末転倒の経済思想によって、組織的でも大がかりな魔術にかけられ、猛進してきたのではなかったのか。

こうして市場に氾濫していく商品の中には、程度は様々ではあるが、人間の生存にとって本当に必要かどうか疑わしいもの、それどころか危害や害悪すら及ぼすものも少なくない。リニア新幹線などますます超高速化する運輸手段しかり。首都圏直下型地震の危機迫る中でも、人口分散の発想とは全く逆に、二〇二〇年東京オリンピックを梃子に、再開発によってなおも人口集中を促す超巨大都市しかり。莫大な資金を投じ、子どもじみた好奇心を煽り騒ぎ立て、人寄せする東京スカイツリーはさしずめその象徴か。二〇二五年大阪・関西万博と絡めて、成長の起爆剤として構想されている、人間の欲望を際限なく煽るカジノ中核の統合型リゾート（IR）しかり。高速鉄道、巨大空港・港湾施設、未来都市スマート・シティ等々、巨大パッケージ型インフラしかり。新型コロナウイルス・パンデミックに便乗し、さらに拍車をかけられるデジタル社会化しかり。いったん事故が起これば空間的にも、時間的にも、社会的にも計算不可能な無限大の被害を及ぼす危険きわまりない原発しかり。果てには人間を殺傷する巨大武器体系（陸上の軍事基地施設から海上、宇宙空間にも及ぶ）しかり。例を挙げれば、身の回りの雑多な商品から巨大商品まで枚挙にいとまがない。まさに

これら膨大な商品の堆積物は、資本の自己増殖運動の落とし子そのものである。

だとすれば、一年間に生産された財やサービスの付加価値の総額を国内総生産（GDP）とするその内実は、様々な疑問や問題点を孕んでいることになる。GDPには、人間にとって無駄なもの、不必要なものどころか、人間に危害や害悪すら及ぼすもの、自然環境の破壊につながる経済活動や、人のいのちを殺傷する武器生産など、これら生産活動から生み出される莫大な付加価値も含まれていると見なければならぬ。しかも近年、その比重がますます高まる傾向にある。その上、サービス部門の付加価値の総額は、一貫して増大の傾向にあり、とりわけ金融・保険および不動産部門については、アメリカをはじめ西欧、日本など先進資本主義国では、GDPに占めるこの割合をますます増大させている。

一般的にサービス部門の付加価値総額の増大の根源的な原因には、歴史的には、まぎれもなく直接生産者と生産手段との分離にはじまる、きめ細やかな家族機能の著しい衰退がある。金融・保険および不動産部門の付加価値総額のGDPに占める割合の急激な増大の背景には、金融資本の経済全般への君臨・支配とその跳梁が透けて見える。そこには、実体経済への攪乱とやがて陥る社会の壊滅的危機への影を見て取ることができる。

さらに注視すべきことは、GDPには個人の市場外的な自給のための生活資料の生産や、例えば家庭内における家事・育児・介護などの市場外的なサービス労働、非営利的なボランティア活動等々、それに非商品の私的な文化・芸術活動などによって新たに生み出される価値は、反映されていない。今後、グローバル市場競争がますます激化していけば、こうした商品・貨幣経済外の非市場的で私的な労働や生産活動が生み出す多様で豊かな計り知れない膨大な価値は、いつの間にか狭隘な経済思想のもとに、強引にしかも大がかりにますます排除されていくのではないかと憂慮せざるを得ない。

このように考えてくるならば、経済成長のメルクマールとされてきたこれまでのGDPに基づく成長率に

は、もはや前向きで積極的な意義を見出すことができないうのではないか。それどころか、皮肉にもある意味では、市場原理至上主義「拡大経済」社会という名の、いわば人間のからだの内部に発症した癌細胞の増殖と転移の進み具合を示す指標としての意味しか持ちえないことにもなりかねないのである。

「菜園家族」の創出と資本の自然遡行的分散過程

さて、先にも触れた原発苛酷事故に象徴される今日の科学技術の「收拾不能の事態」に至るまでの資本の自己増殖運動、つまり資本の蓄積過程には、大きく二つの歴史的段階があった。一つは、前近代から近代への移行期における「資本の本源の蓄積過程」であり、もう一つは、それによって準備された原初的な資本の基盤の上に展開される、全面的な商品生産のもとでの本格的な「資本の蓄積・集中・集積過程」であり、その延長線上に現れた今日の巨大資本の形成過程である。

この資本の自己増殖運動の全歴史の終末期の象徴とも言うべき今日のこの科学技術の「收拾不能の事態」は、私たちにこれまでの「資本の蓄積・集中・集積過程」からの訣別と、それに代わるべき「資本の自然遡行的分散過程」の対置をいやが上にも迫っている。こうした時代を迎えるに至ったのは、成るべくして成った歴史の必然と言わなければならない。

ところで、二一世紀生命系の未来社会論具現化の道である「菜園家族」社会構想は、既に見てきたように、現代賃金労働者と生産手段（自足限度の小農地、生産用具、家屋など）との再結合によって未来社会を展望するのであるが、めざすべき自然循環型共生社会（じねん社会としてのF P複合社会）への中間発展段階としての、週休（2 + α）日制の「菜園家族」型ワークシェアリング（但し「ハニハニ」に基づくC F P複合社会においては、一人の人間の労働時間から見れば、一週間のうち資本主義セクターCに投入される労働は、従来の5日から（5 - α）日に減少する。つまりこのことは同時に、社会全体から見れば、純粋な意味での賃金労働者

としての社会的労働力総量の減少をも意味している。

したがって、このことを資本の側面から見れば、それは剰余価値の資本への転化のメカニズム、つまり資本の自己増殖運動のメカニズムを漸次衰退へと向かわせ、やがて巨大資本は質的变化を遂げながら縮小・分割・分散の道を辿っていく運命にあることを意味している。こうした資本の自己増殖の衰退傾向は、これまでのような巨大資本による科学技術の独占を自ずと困難にし、科学技術が資本の僕（しも）の地位から次第に解放され、自由な発展の条件を獲得していく過程でもある。

一方、「菜園家族」型ワークシェアリングによって、人々が「菜園」や「匠・商」の自営基盤を自らのものにし、家族や地域に滞留する時間が飛躍的に増えることは、人々の知恵と力が家族小経営セクターFに集中して注がれ、その結果、地域にもともとあった自然的・人的・文化的潜在力が最大限に生かされ、素材ではあるが人間性豊かな地域づくりが可能になることを意味している。こうして、森と海を結ぶ流域地域圏の農山漁村部に新たに創出される「菜園家族」や「匠商家族」、そして流域地域圏の中核都市の「匠商家族」が担い手となって、自然循環型共生の「新たな技術体系」創出の時代を切り拓いていくことになる。

各地の風土と長い歴史の中で育まれ、市場原理の浸蝕にもめげずにそれでも何とか生き延びてきた農林漁業の細やかな技術や知恵、民衆のものづくりの技や道具、それに土地土地の天然素材を巧みに生かした伝統工芸や民芸に象徴される、実用的機能美に溢れた精緻で素材本伝統的技術体系は、自然科学との共振に伴って人類が到達する新たな知見から再評価されることにもなる。同時に、「資本の自然遡行的分散過程」の進展に伴い地方に分割・分散されていく「高度な」科学技術との融合もはじまる。このことは、これまでには見られなかった全く異質の自然循環型共生の「新たな技術体系」が地域に創出されていく可能性が、大きく開かれていくことを意味しているのである。つまり、「菜園家族」の台頭は、異次元の新たな科学技術体系の生成・進化に大きな道を拓くのである。

C・F・P複合社会の展開過程におけるC、F、Pそれぞれのセクター間の相互作用に注目するならば、「菜園家族」や「匠商家族」が熾烈な市場競争に抗して自己の暮らしを守るために、生活と生産の基盤を日常普段に自らの手で築いていく結果、家族小経営セクターFは全体として次第に力をつけ、大勢を占めるに至る。これと同時に併行的に、資本主義セクターCは相対的に力を弱め縮小過程に入っていく。それに伴い公共的セクターPも次第に強化されていく。家族小経営セクターF内の「菜園家族」と「匠商家族」の個々の構成員を見ると、週休（ $2 + \alpha$ ）日制の「菜園家族」型ワークシェアリング（但し「 α 」が制度的にも定着していく中で、週に（ $2 + \alpha$ ）日間は自己のセクターF内で家族とともに働き生活し、残りの週（ $5 - \alpha$ ）日間は資本主義セクターCまたは公共的セクターPの職場に勤務することになる。

このように、一人の人間が日常的に二つの異なるセクターでの労働に携わることによって、人間の多面的で豊かな発達が日常的に保障されることになる。それはまた同時に、旧来の科学技術が、家族と地域という場において、大地に根ざした伝統的なものづくりの技術体系と融合し、質的变化を遂げていく条件を恒常的に獲得したことにもなるのだ。こうした新たな社会的条件のもとで、市場原理に完全なまでに統御され、歪められてきた従来の科学技術は新たな展開過程に入り、これまでとは全く異質な、自然循環型共生社会にふさわしい、つまり自然の摂理に適った異次元の「新たな科学技術体系」の創出がはじまるのである。これはまさに、C、F、P三つのセクター間の相互補完的相互作用の展開過程の中ではじめて保障されるものであると言ってもいいであろう。

こうして「菜園家族」や「匠商家族」は、産業革命以来剥奪されていったものづくりの力を自らの手に取り戻し、これまでには見られなかった新たな生活創造への意欲と活力を得て、市場原理至上主義に抗する自己の生活防衛としての自らの地域協同組織体「なりわいとを」を組織しつつ、やがて森と海を結ぶ流域地域圏の中核都市を要に、自らの地域ネットワーク、つまり豊かで生き生きとした多重層的な地域団粒構造をこ

の流域地域圏全域に築きあげていくことになるであろう。

「菜園家族」と「匠商家族」を基盤に成立するC・F・P複合社会、さらに抗市場免疫の自律的世界、つまり自然循環型共生社会（じねん社会としてのF・P複合社会）では、四季折々の移ろいに身をゆだねられる人間の暮らしと、その母胎とも言えるべき自然が根幹を成している。こうした中で人々は、自然と人間との物質代謝の循環に直接関与していることから、この循環のためには、いのちの源である自然そのものの永続性が何よりも大切であることを、日常的に身をもって実感し生きていく。したがって、この循環を持続させるためには、最低限必要な生活用具や生産用具の損耗部分を補填しさえすれば、基本的には事足りると納得できるのである。自然との物質代謝の循環を破壊してまで拡大生産をしなければならぬ社会的必然性は、本質的にそこにはない。浪費が美德でなければ成り立たない市場原理至上主義「拡大経済」の社会に対して、こうした社会ではモノを大切に長く使うことや節約が個人にとっても家族にとっても理に適っているのであって、やがてそれは社会の倫理として定着していく。多くの人々がかつての伝統的な自然循環型の暮らしの中で生きていた高度経済成長以前のついでの間まで、日本社会において節約やモノを大切に使うことが美德であったことを想い起こせば、それは十分に頷けるはずである。

異次元の新たな科学技術体系の生成・進化と未来社会

早くも一九七〇年代初頭に、現代文明の物質至上主義と科学技術への過大なまでの信仰を痛撃し、巨大化の道に警鐘を鳴らしたE・F・シューマッハー（一九一〇～一九七七）が世に問うた名著『スモール・イズ・ビューティフル』。今、私たちの目の前に再び甦ってくる。その先見的知性にあらためて注目したい。

3・11フクシマによってパンドラの箱の蓋が開けられ、「収拾不能の事態」に陥った今、現代科学技術を手放しで礼賛していればそれで済む時代はもうとうに過ぎてしまった。精密化・複雑化・巨大化への自己運

動を続ける現代科学技術。得体の知れない妖怪としか言いようのないこの巨体は、大自然界の摂理に背き、ついには自己制御不能に陥り、同行者であり主でもある資本に人類を丸ごと生け贄として捧げるとでもいうのであろうか。ここに至った原因は一体何だったのか。そしてそれを克服していくためにどうすればいいのか。3・11フクシマは、これまでの科学技術のあり方と経済社会のあり方の両者を統一的に、しかも根源的に問い直すよう迫っている。

それには先にも述べたように、一八世紀イギリス産業革命以来、延々と続けられてきた厄介極まりないこの資本の自己増殖運動の過程に抗して、いよいよ「資本の自然遡行的分散過程」を対置する以外に道は残されていないのではないか。たとえそれが三〇年、五〇年、八〇年先の遠い道のものであっても、二一世紀の全時代を貫く長期展望のもとに、その基本方向をしっかりと定めておくこと。こうすることによってはじめて、自然界の摂理に適った、二一世紀にふさわしい自然循環型共生の新たな次元での科学技術体系の創出の可能性が見えてくるのではないだろうか。

そして、この可能性を確実に保障する現実社会における局面は、紛れもなく「菜園家族」を基調とするC F P複合社会のC、F、P三つのセクター間の相互補完的相互作用の展開過程の中にある。特にこの展開過程において必然的に進行する、二一世紀の新しい人間の社会的生存形態としての「菜園家族」の創出それ自体が、剰余価値の資本への転化のメカニズムそのものを狂わせ、「資本の蓄積・集中・集積過程」を抑制し、資本主義を根底から揺るがすものになっていること。つまり、社会の基礎単位である「家族」そのものを労・農一体的な新たな家族形態、すなわち「菜園家族」へと一つひとつ時間をかけて改造することが、資本の自己増殖のメカニズムを社会の深層から次第に衰退へと向かわせ、その結果として、「資本の自然遡行的分散過程」を社会の土台からゆっくりと着実に促す決定的に重要な契機になっていることに刮目しておきたい。それはとりもなおさず、一八世紀イギリス産業革命を起点に成立した資本主義二百数十年におよぶ生成・

進化の歴史過程において、おそらくははじめて、現実社会のさまざまな分野における広範な民衆一人ひとりの努力からはじまる、一見何の変哲もないこの「菜園家族」創出という日常普段の地道な人間的営為が、結果的にはあるが、市場原理に抗する免疫を家族自らの内部につくり出し、資本主義そのものの衰退と次代の自然循環型共生社会（じねん社会としてのF P複合社会）への胎動を古い社会（資本主義）の深層から確実に準備し、促進していくことになることに気づかなければならない。そこに、近代を根底から覆し、歴史を大きく塗り替えていくその重大な世界的意義を見出すことができるのである。それは同時に、この自然循環型共生の未来社会の内実をいっそう豊かなものにしていく重要なプロセスでもあるのだ。

こうして、精密化・複雑化・巨大化を遂げ、ついに母なる自然を破壊し、人間社会をも狂わせ破局へと追い込んだ現代科学技術に代わって、これまでは全く別次元の異質な自然循環型共生の新たな科学技術体系が確立されていくであろう。それは、今から四五年ほど前にシューマッハーが唱えた「中間技術」の概念をはるかに超え、3・11後、気候変動、新型コロナウイルス・パンデミック、そしてウクライナ戦争という世界的複合危機の新たな時代状況の中で鍛錬され、いっそう豊かなものになっていくにちがいない。

巨大化し、ついに自然、そして人間社会との対立物に転化した現代科学技術に代わって、自然循環型共生にふさわしい、人間の身の丈にあった、これまでは想像だにできなかった全く異次元の「潤いのある小さな科学技術」の新たな体系が生成・進化していくにつれて、国内総生産（GDP）を構成する価値の総体からは、人間にとって不必要なもの、無駄なもの、ましてや人間に危害や害悪を及ぼすもの、自然に対して不可逆的な破壊作用を及ぼすもの、そして人間を殺め、人類を破滅に落とし入れる膨大な兵器体系は、次第に取り除かれていくであろう。その代わりに、自然循環型共生の「潤いのある小さな科学技術体系」によってつくり出される新たな価値によって置き換えられていくにちがいない。

このプロセスは緩慢で実に長期にわたることが予想されるが、自然循環型共生のこの「潤いのある小さな

科学技術」がやがて大勢を制するにしたがって、経済成長はもはや意義を失い、この新たな経済社会システムの持続可能性こそが最大の関心事になっていくであろう。その時、政策立案や経済運営にはなくてはならないものとして、これまで後生大事にされてきた旧来の経済成長率の数値目標自体が、もはや全く意味を失い、それに代わってこの新たな経済社会システムの持続可能性を示し得る客観的指標の考案が社会的にも要請されてくるにちがいない。

イギリス産業革命以来長きにわたって一貫して資本の自己増殖運動に寄り添い、精密化・複雑化・巨大化を遂げ、ついにフクシマ原発の苛酷事故を引き起こし、母なる自然を破壊し、人間社会をも狂わせ、さらには核兵器による人類破滅の脅威と不安に人々を追い込んでいく現代科学技術は、やがて自然の摂理、つまり、本書の第三章「今こそ近代のパラダイムを転換する」で述べた自然界の生成・進化のあらゆる現象を貫く「適応・調整」の原理、つまり自己組織化の原理に即して、人間と自然との再融合の可能性を大きく切り拓く、まったく異次元の新たな科学技術体系に席を譲っていくことになる。その時、科学技術は、資本の自己増殖運動に寄り添い従属する下僕としてではなく、そこから解き放たれ、自由な世界へと羽ばたいていくことになるであろう。これまで科学技術が歩んできた道は、あまりにも歪められた実に惨めな歴史であった。科学技術が本来の真価を発揮できる本当の歴史は、3・11東日本大震災・フクシマ原発苛酷事故、そしてそれに続く新型コロナウイルス・パンデミック、深刻化する地球温暖化による気候変動、さらにはウクライナ戦争という世界的複合危機を境にこれからはじまるのである。

☆引用・参考文献☆

- 現代技術史研究会 編『徹底検証 21世紀の全技術』藤原書店、二〇一〇年
- 池内了『科学と人間の不協和音』角川書店、二〇一二年
- 山田慶兒『制作する行為としての技術』朝日新聞社、一九九一年
- E・F・シューマツハ著、小島慶三・酒井懋訳『スモール・イズ・ビューティフル——人間中心の経済学』講談社学術文庫、一九八六年
- サティシユ・クマール著、尾関修・尾関沢人訳『君あり、故に我あり——依存の宣言』講談社学術文庫、二〇〇五年
- 石井一也『身の丈の経済論——ガンディー思想とその系譜』法政大学出版社、二〇一四年
- 大友詔雄『原子力技術の根本問題と自然エネルギーの可能性』（上）（下）『経済』二〇一二年七月号・八月号、新日本出版社
- 尾関周二『脱原発・持続可能社会と文明の転換——農を基礎にしたエコロジー文明へ』『季論21』二〇一二年冬号、本の泉社
- 友寄英隆『A Iと資本主義——マルクス経済学ではこう考える』本の泉社、二〇一九年
- 中山徹『産業構造転換と新たな都市戦略——『スーパースティ』構想とその問題点』『経済』二〇一九年十二月号、「特集 岐路に立つ日本資本主義（続）」、新日本出版社
- 内田聖子『自治の極北——スーパースティ構想と国家戦略特区——』『世界』二〇二〇年六月号、岩波書店
- 「特集『デジタル社会』実像と課題」、『経済』二〇二〇年十二月号、新日本出版社
- 尾関周二『21世紀の変革思想について——環境・農・デジタルの視点から』本の泉社、二〇二二年